

いた。こういった人はダモイとは言っていないかった。

④ 常時日本の軍医による健康診断が医務室であり、体調のすぐれない者は作業を休ませていた。たちの悪い警備兵は時々ラゲル内に入ってきて、ブイストラ、ブイストラと言ってラボータと叫んだが、通訳の将校の配慮により解決できた。

⑤ 朝夕の点呼、翌日の作業場などの連絡あり、消灯、起床の伝達は旧軍隊時代と同じであった。往復の監視はソ連の警備兵がやっていた。ほとんどの者が、昼の休憩時以外、民家、バザールなどへ行く者はなかった。

⑥ 初め一年間は関東軍の貨物廠にある衣服を着用させ、何不自由なことはなかったが、作業の結果、衣服がいたんだり修理しなくてはならなくなり、ソ連の古いものを着用するようになった。厳冬越冬用のシューパー（毛皮付）は日本製、後、ソ連製のものが着用させられた。何とか氷点下三〇度、四〇度の気候に耐えられた。

シベリア抑留

和歌山県 瀧本 宏

私は、大正十年七月十七日、和歌山県東牟婁郡宇久井村高津気（現在の那智勝浦町宇久井）で生まれ、宇久井村小学校卒業後、県立新宮中学校に入学しました。昭和十二年夏、支那事変が勃発し、三十歳前の男子が召集されました。私方の作男として農作業をしてくれていた人も同様でしたので、私は中学三年で退学して、七十五歳の祖父と一町二反の山田を耕作して一家九人の生活を助けておりました。

当時、父は四十歳過ぎでしたが、隣町の新宮市役所で農業関係の課長をしておりましたので、経済的には苦労はなかったようでした。

昭和十七年一月十日、大阪の信太山野砲第四連隊に入隊した。大東亜戦争が始まって一カ月後のことでした。一期検閲後、三月三十日出動、東満の東安省密山

県第十二国境守備隊に配備され、昭和二十年三月までおりました。

三月二十日、編制改変があり、牡丹江の対岸で、虎頭の第四国境守備砲兵隊と混成部隊となり、ソ連軍の満ソ国境不法侵入のとき、八月九日は牡丹江におりました。八月十一日、部隊に鏡泊湖の山中へ行軍の出勤命令が出て、十三日に東京城に着きました。昼夜兼行の行軍であった。東京城で和歌山村の開拓団の標札を見つけて開拓団の子供に村長の名を尋ねているときに、群の中から立派な髭を伸ばした人が「私が宇井です」と申されました。私は「新宮の瀧本万吉の長男です」とあいさつ申し上げると、大変感激された、豚を殺してまでサービスしてくれたり、また馬鈴薯を御馳走してくれました。

ソ連の空爆や機銃の掃射を受けながら、鏡泊湖の発電所に着いたのは八月十五日の夕方でした。そのとき日本が降伏したことを知らされた。中隊はその後南湖頭の陣地まで急行しました。陣地には着いたものの、部隊や軍司令部関係との情報が得られず連絡や命令が

届かないために、二十日朝、少尉一名、曹長一名、伍長「私」一名と上等兵三名と、決死の覚悟で部隊との連絡に出たが、ソ連軍の大多數の戦車部隊に阻まれて原隊に帰るよりほかなかった。それから鏡泊湖の山の中に二週間ほどいて、九月三日出発して午後一時ごろ、鏡泊湖南湖頭で武装解除された。そのような厳しい状況の中で、少年たちを連れた和歌山村の髭の宇井さんに再会して無事を喜び合いましたが、運命的な出会いであった。三年後に帰国した私は、あの髭のゆえに宇井さんはソ連軍に射殺されたということをお父から聞かされて、痛恨の思いをしたものである。

その後は牡丹江市の掖河^{ヤハ}まで歩かされ、十月十五日まで当地におりました。その間の牡丹江で、二カ月前まで軍属をしていた朝鮮人の中村という男に出会ったときの印象はたまらない。言葉では表現できない悪寒を覚えたのです。彼に、持っていた三八式歩兵銃で小突かれ、「お前は負け犬だ、黙って歩け」と怒鳴られたときの屈辱、あんなにまで仲良くしていたのにと唇をかみしめたことは忘れられない。

東京ダモイということと掖河の駅から、二段に仕切られた貨物列車に暗闇の中で乗せられた。しばらく出発を待っていたら一人の兵士が「入院下番のロートルです。よろしく願います」と言って乗車して来て間もなく発車し、東に向かった。翌日の午後、大きな駅で前後反対に方向を変えて進行し始めて行くのを知った。そこで気づいたことは、これは東京ダモイでないということであつた。貨車が一週間も走つただろうか、列車が止まり扉が外から開けられた。「アツ、海だ」と叫ぶ声に皆が起きた。見ると、これはバイカル湖であつた。遙か対岸の山が雪で白くなっているのが望めた。イルクーツクを過ぎ、タイセツトに着き、森林地帯に入り、ネーベルスカヤとかいう地点から三十キロほど離れた山の中の収容所に入れられた。

所内には建物が六棟で二千人収容されることになり、内一棟は炊事場と浴場であつた。その後、我々が糧秣を取りに鉄道のそばまで行くようになって知つたことだが、二キロぐらいの間に二カ所の収容所があり、全員で五千人ほどになっていることが噂された。この地

域での収容人員らしい。私たちは小隊五十人、三個小隊をもつて中隊とし、三個中隊で大隊をといふことで作業隊を編制した。ネーベルスカヤから百六十三キロ地点で野宿や仮宿舎を作りながら、森林伐採や丸太二ツ割りの板敷き道路の建設に従事した。毎日が「ノルマ、ノルマ」で作業は厳しく、党の監督官に追い立てられ、日照時間の長い夏場は十六時間労働が通常のことであつたし、また冬場は想像以上の寒さで平均零下三五度から四五度であつた。零下五〇度にもなると空気が凍つて、きらきら輝いて見事でしたが、こんな日は作業は休みであつた。

私たちが最初に収容された場所での食事は高粱か粟であつた。量にして茶碗一杯ぐらいで副食は何もなく、栄養価値のあるものではなかつた。そのためであつたのか、牡丹江を出発直前に乗車してきて、輸送途中で私と同県人であることを知つて私の分隊に入れてもらった新宮市の農林課に勤めていたという清水稔氏が、収容所に到着後二週間ぐらいの十一月二十日に他界した。その臨終の姿は今も私の臉の底に残り、彼の最後

の言葉は「海老とあわびが食べたいなあ」であつたことが忘れられない。

昭和二十一年一月ごろから寒さが厳しく零下五〇度の日が続ぎ、そして死亡者が増え始めていた。凍土を砕いて掘り埋葬するのであるが、大変である。それが毎日であり、一人二人ではない。死体を薪のように重ねて埋めたのです。まさに地獄絵であつた。

昭和二十一年十一月に私も栄養失調になり、病院のあるネーベルスカヤまで下つた。ここでも多くの兵士たちが死んでいった。私は何としても家族の顔をもう一度見るのだと決意し、体力の回復のため、雪の上にごぼれた魚や野菜を拾つて命を保つてきたものです。

昭和二十二年五月に再び前の収容所から十キロ離れた地点に送られ、厳しい鉄道工事に従事することになった。二十二年十一月ごろ一枚の日本製葉書が配られ、日本へ便りを出すように言われ、借りた鉛筆で父あてに「生きてシベリアにいること」だけを知らせることができた。

それから一カ月後、私たち五十人は、トラック二台

で更に四キロ奥地で、アンガラ川に近いという所に送られ、井戸掘りと大きな木造家屋の建築作業であつた。井戸掘りは三交代二十四時間制で、排水ポンプ押して大変でした。

やがてシベリアにも五月の日が照り、雪が溶け始めたころ、私たち一緒にいた二百人余りに「東京ダモイ」が伝えられ、自分たちで造成した鉄道で貨物列車に詰め込まれタイセットまで二日ばかりで出てきました。そこで見た国民生活の変化は驚くばかりで、特に衣服の色の明るさと鮮やかさが多くなっていたことである。バイカル湖にさよならを告げナホトカに着いた。昭和二十三年五月二十日ごろであつた。

ソ連で働いた労賃六十ルーブルをもらい、証明書にサインさせられタイセットで受け取った金が、煙草の二十本入り三箱買うとなくなりました。満州での預金通帳も盗られ無一文である。日本に着いたらどうして故郷へ帰ろうかなと悩むナホトカでのひと時であつた。